

論文要約

新名一仁「室町期島津氏領国の政治構造」

目次

序章

第1部 島津奥州家による領国形成とその特質

第一章 南北朝期島津奥州家の大隅・日向進出とその論理—奥州家独自の領有観形成—

第二章 康暦・永徳期の南九州情勢

第三章 応永期における島津奥州家の領国拡大と政治構造

第2部 一五世紀中期の領国内争乱とその影響

第一章 永享・文安の薩摩国「国一揆」—薩摩国山北国人の反島津闘争—

第二章 嘉吉・文安の島津氏内訌

補論 大覚寺義昭事件の政治的影響

—島津家文書「年欠卯月一四日付大内持世書状」の意義—

第三章 文安元年日向国南部国人一揆の意義

第3部 室町期島津氏「家中」の変遷と島津氏領国の解体過程

第一章 日向国樺山氏の成立過程とその特質—室町期島津氏「御一家」の由緒と家格—

第二章 室町期島津氏「家中」の成立と再編

第三章 室町期島津氏領国の解体過程

終章 室町期島津氏領国の政治構造と「守護」

本論文は、室町期島津氏による領国形成やその崩壊過程を明らかにし、ひいては、室町期九州における守護の存在意義、「室町幕府—守護体制」との関係性を明らかにするための基礎的作業として、①室町期島津氏領国の政治史を再構築すると共に同領国内の政治的画期を明らかにし、②室町期島津氏領国内の「御一家」・「国衆」とよばれる自立した勢力と守護権力との関係、そして守護家直臣層を含めた島津氏領国の政治構造を明らかにしていくことを目的としたものである。

序章では、まず、室町期島津氏の領国形成、権力論に関する先行研究の傾向・共通点から、その問題点を洗い出した。すなわち、従来の研究では、室町期島津氏と戦国期島津氏を連続した家として捉え、未熟な「守護大名」段階から成熟した「戦国大名」への発展過程を明らかにしようとする傾向が強く、結果として室町期の領国支配を過小評価し、その独自研究の足かせとなってきた。加えて、島津氏の領国支配の分析が、家政機関・官僚組織、家臣団編成、知行制といった制度史の解明に偏重した結果、領国内政治史の分析が疎かとなり、ややもすると史料価値の低い近世の編纂物に基づく政治史叙述が横行する結果を招いた。そして、領国内諸勢力を全て守護島津氏の「家臣団」と規定した結果、室町期守護領国最大の特徴でもある、領国内で自立した存在である「御一家」・「国衆」とよばれる勢力の政治的位置、守護権力との関係・距離感が十分明らかにされてこなかったことを指摘した。その上で、前述のような目的を明らかにし、本編の前提として、室町期島津氏の系譜が連続したものであるという近世の名分論的歴史認識を排し、室町期に分裂した守護家の家筋と本宗家（惣領家）の移動（総州家→奥州家→相州家）を整理するとともに、「御一家」、「国衆」、「御内」という島津氏領国内特有の身分呼称について明確化した。

第1部「島津奥州家による領国形成とその特質」では、南北朝中期から始まる室町期島津氏の領国形成が、いかなる政治的背景のもと、いかなる論理でおこなわれたのかを検討した。

第一章「南北朝期島津奥州家の大隅・日向進出とその論理—奥州家独自の領有観形成—」では、鎌倉末期の時点で薩摩国守護職のみを保持していた島津氏が、鎌倉幕府倒壊後に大隅国守護職を獲得して以降、どのような経緯で大隅・日向両国に進出し、いかなる論理のもとに領国形成をおこなっていたのか分析した。島津氏による大隅国進出は、建武政権による同国守護職およびこれに付随する島津荘大隅方寄郡預所職補任を前提とし、観応の擾乱期、島津奥州家の祖氏久が薩摩国の南朝方（征西將軍宮方）と和睦することで実現した。しかし、その過程で島津氏久は、所職を保持する島津荘大隅方寄郡以外の地域についても実効支配し、あたかも自らの所領であるかのように自陣の国人に知行宛行状を発給するなど、幕府の所領政策を無視する形で領域支配を展開した。そして、14世紀中期には、守護職も所領も保持していない日向国南部に進出するなど、一般的な守護とは異なり、幕府からの公権付与に基づかない独自の論理によって領国形成が開始された。この独自の論理は、氏久の父貞久の領有観、すなわち「名字の地である島津荘が広がる薩摩・大隅・日向三か国全域が島津氏の本領であり、幕府からも制約を受けない排他的支配権を有する根本領国である」という認識に基づくものであった。この特異な領有観のもと、島津氏は守護職を持たない日向国への支配を進め、非島津荘地域を島津荘と見なして安堵・宛行行為をおこなうに至る。これに対し幕府は、応永11年(1404)、島津元久に日向・大隅両国守護職を安堵し、島津氏独自の支配論理を追認してしまう。

第二章「康暦・永徳期の南九州情勢」では、島津氏久が日向国南部支配を確立する、康暦・永徳期の日向・大隅両国の政治史再構築を試みた。まず、近世の編纂物によって語られてきた、九州探題今川了俊の子息満範率いる国人一揆勢と島津氏久勢が戦ったとされる「蓑原合戦」・「都城合戦」二つの戦いの年代比定を良質な史料を用いておこない、二つの戦いが同一の戦いで永和5年(1379)に起きたものであることを明らかにした。そして、今川了俊方と島津氏の抗争が続いた康暦・永徳年間について、政治情勢をうかがえる無年号文書の年代比定を行い、了俊による南九州統治が破綻していく過程を明らかにした。

第三章「応永期における島津奥州家の領国拡大と政治構造」では、応永年間の島津奥州家当主元久・久豊二代にわたる領国拡大過程を明らかにしつつ、これを支えた諸勢力の分析と幕府による守護職安堵の背景を明らかにした。応永2年(1395)、今川了俊の京都召還・九州探題解任により反島津方国人の軍事制圧に成功した総州・奥州両島津家であったが、応永6年(1399)ごろから総州家伊久と奥州家元久の関係が悪化し、両者の抗争に突入していく。最終的にこの抗争を制したのは、薩摩国の有力国人伊集院氏を外戚にもつ奥州家元久であり、幕府もこれを支持して応永11年(1404)元久に日向・大隅両国守護職を安堵すると共に、同16年には元久を薩摩国守護職に補任し、奥州家によって薩隅日三か国守護職は統一された。この背景には、足利義満による日明国交正常化＝日明勘合貿易実現のための入貢があった。14世紀後半、既に島津奥州家は明への入貢を試みており、「日本国王良懷」名義の入明も島津氏によるものとも考えられている。明への最大の輸出品である硫黄も応永年間までに島津奥州家の外戚伊集院氏の支配下にあったとみられ、幕府による三か国守護職の奥州家元久への補任・安堵は、外交権独占を図りたい幕府との駆け引き

によるものと推測できる。これより先、応永8年(1401)ごろまでに奥州家元久は「山東」とよばれた宮崎平野に進出し、弟久豊にその支配を任せた。しかし、兄弟の関係は悪化し、抗争にまで発展するが、応永18年(1411)に元久が死没する。元久は妹の子伊集院初犬千代丸を家督継承者としていたが、最終的に弟久豊が、大隅・日向の御一家・御内らの支持を受けて家督を奪取し、島津総州家・伊集院氏との抗争に突入する。この家督相続をめぐる紛争の背景には、島津奥州家を支える御一家・御内・国衆ら諸勢力内に、「薩摩閥」と「大隅・日向閥」とでもいべき地域間の対立があり、後者に支持された久豊のクーデターにより家督の改替が図られたとみられる。また、両派の抗争時、日明関係は將軍足利義持の朝貢拒否により国交が断絶しており、唐物輸入ルートとして九州西海岸に来航する「南蛮船」が重視されていた。南蛮船来航地である万之瀬川河口付近を実効支配する島津総州家・伊集院氏は、幕府に薩摩国守護職補任を求めるが、奥州家久豊はこれを軍事的に制圧して有利に立ち、応永28年もしくは翌29年に幕府から三か国守護職を安堵された。しかし、その後も奥州家権力を「薩摩閥」と「大隅・日向閥」が支える政治構造は温存され、領国統治のバランスが大きな政治課題となっていく。

第2部「一五世紀中期の領国内争乱とその影響」では、15世紀中期に勃発した薩摩国を中心とする「国一揆」とよばれる反島津方国人の蜂起と、その鎮圧過程で生じた守護島津忠国・持久兄弟の内訌、そしてこの内訌に影響を与えた大覚寺義昭事件、また内訌の最中に日向国南部で「第三極」形成を目指した国人一揆について検討し、各事案の原因と結果、島津氏の領国支配に与えた影響について明らかにした。

第一章「永享・文安の薩摩国「国一揆」—薩摩国山北国人の反島津闘争—」では、永享4年(1432)守護島津忠国が日向国山東制圧のため遠征中に勃発した「国一揆」について、その存続期間と主体勢力を明らかにするとともに、南北朝期以来の反守護島津氏方国人の抵抗活動のなかに位置づけた。まず、従来異なる史料、異なる視点で論じられてきた「国一揆」について関係史料を再検討し、永享4年(1432)に薩摩国南部の伊集院氏とその与党、そして同国山北地域の国衆が連携して起こした反島津闘争であることを明らかにした。この蜂起は同8年ごろいったん沈静化するが、文安年間(1444～49)に入り肥後国の菊池・相良両氏の支援を受けつつ再蜂起し、宝徳3年(1451)までに島津氏によって鎮圧された。この「国一揆」の主体勢力のうち薩摩国山北の国人は、南北朝後半以降、守護島津氏の支配に抵抗し、肥後・大隅・日向の国人と連携しつつ、九州探題今川了俊の「將軍への直の忠」という政治思想の影響を受けつつ断続的に反島津闘争を続けており、15世紀中期の將軍足利義教による九州支配強化と奉公衆(將軍直属国人)編成という政治的影響を受け、肥後国守護菊池氏や相良氏との強いつながりを前提に蜂起したと考えられる。しかし、この「国一揆」の崩壊は、逆に守護島津氏による薩摩国支配強化を招き、同国内の平安末期・鎌倉期以来の有力国人の多くが滅亡・没落する結果となった。

第二章「嘉吉・文安の島津氏内訌」では、ややもすると第一章で検討した「国一揆」の一部と見なされてきた、守護島津忠国・持久兄弟の内訌についてその実態を検討し、島津氏領国の政治構造との関係について明らかにした。まず、近世の編纂物や先行研究で「守護代」と位置づけられていた島津持久の地位は、守護そのものに他ならず、永享4年(1432)に勃発した「国一揆」の鎮圧に失敗した兄忠国が、押し込め同然に「隠居」を余儀なくされ、その権限を継承したものであることを指摘した。この守護職権継承は臨戦時の一時的

な措置との認識が領国内にあったが、「国一揆」沈静化後に持久は正式な守護職補任を目指し、永享6年(1434)には、錦江湾沿岸を中心に、島津持久を支持する御一家・御内等による一揆が結成された。これに対し、島津忠国とその嫡男安房(のちの立久)を支持する御一家・御内らは、翌永享7年に忠国と契状を取り交わして一揆を結成し、領国内は二派に分裂した。ただ、両派の対立は軍事抗争には至らず、永享11年(1439)には島津持久が島津本宗家家督の継承を宣言するに至る。しかし、同年、将軍足利義教に反旗を翻して京都を出奔していた、義教の異母弟である大覚寺門跡義昭が、島津氏領国の日向国櫛間に潜伏していることが発覚し、義教はただちに島津氏に義昭追討を命じた。嘉吉元年(1441)、大隅・日向の御一家・国衆を動員して大覚寺義昭の追討に成功し、将軍義教の厚い信頼を獲得した島津忠国は、政権奪回を図り、島津持久との全面抗争に突入する。幕府も嘉吉の乱で混乱するなか、忠国を支持して持久追討の御教書を発するが、有力御一家の樺山氏が離反するなど、忠国は苦戦を強いられた。しかし、薩摩国山北で「国一揆」が再蜂起するなど外的要因もあって忠国・持久は和睦し、忠国の政権復帰、持久の薩摩国加世田・河辺・莫祢・和泉領有による島津薩州家の成立に至った。

補論「大覚寺義昭事件の政治的影響」では、第二章で検討した島津忠国・持久兄弟の内訌において、忠国と持久の軍事抗争が勃発する契機となった大覚寺義昭事件に注目し、この事件が内訌に与えた影響について明らかにした。将軍足利義教から義昭の追討命令を受けた島津氏において、本来その追討を実行すべき島津持久はなんらかの事情で動かず、隠居状態にあった兄忠国の主導で義昭追討は実行された。その結果、忠国が専制政治をおこなっていた足利義教の絶大なる信頼を獲得することになり、義教との強いパイプ(取次ルート)を確保した。そして、忠国は将軍義教からの支持を背景に、折しも再蜂起していた薩摩国山北(北部)の「国一揆」を後援する肥後国守護菊池持朝を、大内持世を通じて牽制することに成功し、弟持久追討に踏み切るに至ったとみられる。

第三章「文安元年日向国南部国人一揆の意義」では、第二章で検討した島津忠国・持久兄弟の内訌の際、日向国南部で結成された国人一揆の構成・目的・政治的影響を明らかにした。文安元年(1444)、内訌の最中に、日向国山東の伊東祐堯、同国庄内の樺山孝久・高木殖家・和田正存、同国飢肥の野辺盛吉によって広域的な一揆が成立する。これは、島津忠国・持久の和睦成立を睨み、忠国に近い伊東氏と持久に近い樺山・高木・和田・野辺の各氏が、兄弟からの圧力に抗すべく政治的「第三極」づくりを目指したものであり、その背景には日向国山東、特に大淀川下流域南部の権益確保を図りたい各氏の思惑があった。しかし、この一揆は島津忠国の切り崩し工作により樺山氏が離反して崩壊。伊東氏による日向国山東一円支配が実現し、野辺・和田・高木各氏の没落と島津氏による三侯院・飢肥院領有、樺山氏の政治的地位低下という結果を招いた。

第3部「室町期島津氏「家中」の変遷と島津氏領国の解体過程」では、第1部・第2部の考察をふまえ、守護島津氏権力を時には支え、あるいは守護家当主の改替を図った「御一家」(島津氏庶子家)の特質を明らかにするとともに、この「御一家」と「御内」(守護被官)の集合体を室町期「家中」と捉え、その形成から15世紀後半の再編に至る過程を明らかにした。その上で、文明年間(1469～87)以降頻発する紛争・争乱と、その過程で結成される島津氏「一家中」一揆の背景と目的を明らかにし、守護家「家中」を中心とする室町期島津氏権力の解体過程を、新たな地域秩序の形成をふまえて検討した。

第一章「日向国樺山氏の成立過程とその特質―室町期島津氏「御一家」の由緒と家格―」では、室町期の有力御一家樺山氏を取り上げ、御一家の由緒と島津氏領国内の家格・政治的地位の関係について明らかにした。樺山氏をはじめとする鎌倉末期から南北朝期に分出した、島津本宗家四代忠宗の子息を祖とする御一家（和泉・佐多・新納・樺山・北郷）は、室町期において、足利将軍家から「御教書」を宛行われた本来本宗家と対等な“特別な家格”であると認識されており、樺山家ではその家格を確認すべく、本宗家の内紛後に足利将軍家から直接宛行われた所領の“代替わり安堵”を求めている。ただ、彼ら御一家の名字の地の多くは、足利将軍家から宛行われた直後から当知行できておらず、その領主制確立は島津本宗家の支援によるものであった。本宗家としても、南北朝期の九州探題との抗争を御一家との共闘により乗り切っており、両者は相互依存の関係にあった。

第二章「室町期島津氏「家中」の成立と再編」では、15世紀の「家」構造の変化を「家中」成立の萌芽と捉える研究視角に基づき、室町期島津氏＝島津奥州家の政治構造、とくに奥州家当主と御一家・御内の関係が、15世紀の政治的対立・抗争のなかでどのように変化していったのかを明らかにした。南北朝期において、南朝方や九州探題との抗争により、守護公権に依存しない形で領国形成を開始した島津奥州家は、本来幕府の直勤御家人であった島津氏庶子家（御一家）を自らの主従制下に組み込むとともに、譜代被官に加え島津荘支配権を梃子に荘官層を被官化していった（御内）。この御一家と御内が、室町期島津氏の権力基盤の中核であり、この両者は、14世紀末以降「対等」な一揆的結合を結んで同質化していった。この一揆的結合体は、守護家「家中」と称しうるものであり、15世紀に頻発する内紛において「守護家当主らの親権に基づく家督決定・継承の否定」、「家中」による家督継承の承認、家督の改替をおこなうようになっていく。さらに、第2部で明らかにした15世紀中期の一連の争乱においては、守護家「家中」が守護家当主の改替に加えて、当主の専断権否定、重要政策の「家中」による「多分之儀」に基づく決定を求めるようになる一方、樺山氏らによる第三極形成など、分裂や動揺を見せた。しかし、一連の争乱の結果、平安末・鎌倉期以来の有力国衆が没落・滅亡し、島津奥州家権力の強化・上昇につながった。そうしたなか成立した島津立久政権は、有力国衆との融和を図る一方で、要所の直轄領化と没落した国衆・御一家の親類・被官の取り込みにより「家中」の拡大・再編成を断行し、つかのまの「平和」を島津氏領国にもたらした。

第三章「室町期島津氏領国の解体過程」では、15世紀後半から16世紀初頭における政治過程の分析から、守護家「家中」を軸とする室町期島津氏の政治構造がどのように変質・解体し、戦国的状況が出現していったのかを明らかにした。安定政権を築いた島津立久が文明6年(1474)に没すると、有力一族と拡大・再編された「家中」の対立、そして、文明3～8年の桜島大噴火による政情不安もあいまって、大規模な争乱が頻発する。有力一族の守護家「家中」への反発は、文明9年、同12年の島津氏「一家中」一揆に結実し、有力一族からなる「一家中」を軸とした政権運営を目指す。その後も守護家「家中」との対立・抗争は続き、徐々に守護家直轄領は浸食されていく。そんななか、島津氏領国内には、領国外勢力をも巻き込む形で婚姻関係を前提とする「地域ブロック」とでもいえるべき政治的枠組みが形成されていき、守護家そのものの相対化、新たな秩序形成が模索されていく。16世紀初頭には、こうした「地域ブロック」の盟主的存在として、島津薩州家と島津相州家が台頭し、大永6・7年(1526・27)に後者の島津相州家忠良・貴久父子によ

論文要約

って、島津奥州家から本宗家家督・薩隅日三か国守護職の篡奪が図られる。しかし、これは領国全体の支持を得られず、奥州家・薩州家・相州家の三家による三つ巴の争いへと突入していった。

終章では、第1～3部での考察をふまえ、室町期島津氏領国の政治的時期区分をおこなうとともに、同領国の政治構造の特質と、室町期島津氏と室町幕府の関係を整理しつつ、室町期島津氏領国における「守護」の存在意義について私案を提示した。

室町期の島津氏領国は、政治的に4期に区分される。Ⅰ期は、観応擾乱期（1350年代）～九州探題今川了俊の解任（1395年）で、「室町期島津氏領国形成期」と位置づけられる。Ⅱ期は、九州探題今川了俊解任～島津久豊期（1420年代）で、「島津氏領国の確立・拡大期」であり、島津奥州家が本宗家としての地位を固めると同時に「室町期「家中」の確立期」でもある。Ⅲ期は、薩摩国「国一揆」勃発（1432年）～島津立久死没・忠昌の家督継承（1474年）で、長期にわたる争乱による「島津氏領国の政治構造転換期」であり、「室町期「家中」の拡大・再編期」でもある。Ⅳ期は、文明の争乱勃発（1476年）～島津相州家忠良の政権奪取（1526・1527年）で、「室町期島津氏領国の解体期」であると同時に、南九州における戦国始期と位置づけられる。

室町期島津氏権力最大の特質は、南北朝期には確認できる「島津荘を含む薩隅日三か国は島津氏の根本領国である」という独自の領有観に基づく領国形成にある。観応擾乱期に始まる同氏の領国形成は、その当初から室町幕府・將軍家を相対化しつつ独自の主従制を構築しながら進められ、同氏は、「擬制的島津荘支配権」とでもいうべきロジックのもと、薩隅日三か国の封建領主として振る舞った。そうした特質のもと、本来直勤御家人であった有力御一家は、同氏の主従制下に入ることで領主権を確立し、守護家被官（御内）と一揆的結合を結ぶことで同質化していき、室町期（守護家）「家中」を形成していった。

一方、平安末あるいは鎌倉期以来の由緒をもつ島津氏領国内の国衆は、Ⅰ期においては足利直冬や九州探題と結んで島津氏の領国支配に抵抗したが、Ⅱ期に入るとその多くが島津氏独自の領有観を認めた上でその権力下で自立性を保つ選択をした。しかし、薩摩国山北（北部）の国衆の多くは、直勤御家人としての自立を目指して肥後国など領国外勢力と連携しつつ島津氏への抵抗を続けたが、Ⅲ期までにその多くが滅亡・没落するか、島津氏によって懐柔されるに至った。

また、室町期「家中」の多くが日向・大隅の御一家・御内によって構成される一方、島津氏の外戚伊集院氏や伊作氏といった薩摩国の御一家も、硫黄の支配権を握って島津氏権力の一翼を担う存在であり、島津氏権力は、薩摩を中心とする勢力と大隅・日向を中心とする勢力の地域的二元制を有していた。15世紀初頭および15世紀中期の島津本宗家家督をめぐる争乱は、この二元制に起因するものであったが、島津立久政権の成立による要地の直轄化と「家中」の拡大・再編は、こうした二元制を止揚し、領国の安定化をもたらした。

このように、独自の領有観に基づき領国形成をおこなってきた島津氏ではあるが、15世紀中期までは室町幕府（足利將軍家）に対し薩隅日三か国守護職の補任・安堵を求めており、15世紀中期の争乱時には、島津忠国が將軍足利義教からの支持を得ると共に、源氏姓を使用するなど、積極的に幕府・足利將軍家に接近することもあった。しかし、これは反島津氏勢力が、硫黄支配権や日明・日琉交易ルート上の要港支配を楯に幕府と直接結

論文要約

びつくことを阻止するための場当たりの対応というべきであり、幕府への求心性を示すものではない。室町期島津氏の政治的本質は当初から幕府の相対化にあったとみるべきである。

室町期島津氏にとって薩隅日三か国「守護職」とは、将軍家が改替可能な「吏務」ではなく、鎌倉期以来の「家職」という認識であり、領国形成の初発の段階から「室町幕府一守護体制」下の一般的な「守護」とは異なっていたとみられる。室町期島津氏独自の領有観に基づく領国支配論理を受け入れ、これを支持することで領国支配を支えてきた室町期「家中」にとって、守護島津氏とは、九州探題や反島津氏勢力と対抗するためのいわば「旗頭」であり、主従制の頂点に立つ存在でもあった。その意味で、島津氏領国における「守護」とは、下からの支持・要請によって保証される存在であったともいえる。15世紀中期の争乱で多くの反島津方勢力が滅亡・没落し、領国内のほとんどの勢力を室町期島津氏独自の領有観に基づく秩序のなかに包摂することに成功したのち、家督を継承した島津立久は幕府に守護職補任を求めなかった。それはその必要性が消滅したためと考えられる。